

痔核じかくについて

津島市民病院 外科医師

緒方諒仁おがたあきひと

痔核は、肛門にいぼ状の腫瘍しゅりょうができています。これは実は、静脈がこぶになったものなのです。腸と肛門の境である歯状線より口側にできるものを内痔核、肛門側にできるものを外痔核とよびます。また、他にも切れ痔（裂肛）、腸とのトンネルができる痔瘻しろうがありますが、この2つは静脈とは関係ない別物になります。

内痔核は痛みを起こすことは少ないですが、大きくなるにつれて出血や肛門からの脱出が起ることがあります。年を重ねてくると、お持ちの方も多くなります。診察では、肛門の中を指で触れてしこりがあるかどうかを肛門鏡という器具を用いて、覗いて診断します。

痔核は一般的に癌の原因になるものではない良性的なものなので、特に困ったりしていなければ様子見となり、治療の基本は、生活習慣の改善になります。痔核は排便でいきんだり、便を我慢したりする人に多いと言われています。他にも重いものを持つ人、長時間座る人に多くなっています。

肛門への負担のかかる下痢や便秘の予防を行い、バランスのとれた食事、排便でいきまない我慢しない、長時間座りっぱなしでないなど生活習慣の改善を行います。香辛料等の刺激物やアルコールの摂取を控え目することで様子を見ます。また、外用薬（塗り薬、座薬）があるので、併用してもらうことがあります。炎症をおさえることで症状を緩和します。生活習慣の改善と外用薬で様子を見ていき、90%近くの方は症状がよくなります。

肛門から痔が出てきて困るのや、血が出るのが続いて、症状を繰り返す方、生活習慣の改善や外用薬にて中々改善の見られない方には、硬化療法（ALTA）や手術治療をお勧めすることになります。

ALTA療法について、ご紹介します。ALTA療法は、有効成分を痔核に注射することで、周囲に炎症を起こし力かちに固めて、静脈のこぶに流れる血流をなくして、痔核をゆっくりと縮小または消失させます。注射だけで行われるものになっています。痔の種類によっては、注射だけでは治らないものがあり、その場合は肛門にメスを入れて、切り取ることも併用します。

ALTA療法の流れは、ベッド上で左横向きに寝ていただき、肛門を緩めるためにお尻に麻酔注射を行います。こ

の注射だけは痛みを感じます。その後の、治療である肛門の中に行う有効成分の注射には、痛みはほとんどありません。局所麻酔で緩んだ肛門の中を、肛門鏡という器具を用いて覗きながら、腸壁に何力所か注射をし、注射した所をしっかりマッサージします。最後に痛み止めの座薬を入れて終了です。時間としては、おおよそ30分程度となります。手術当日は、安静にいただき、そのまま経過観察のために一晩入院していただきます。退院後は、日常生活の制限はありませんが、アルコールは患部を刺激するので2~3週間控えていただくこととなります。

ALTA療法の最大のメリットは、低侵襲であるということです。かかる時間も短く、術後の痛みや出血も少なく、効き目としては早いと言われています。ただし、治療で固めたところから、また静脈のこぶに血が通うようになって再度痔が出てきて再発することはあります。したがって、生活習慣の改善が大事になってきます。ALTA療法による合併症としては、直腸が炎症で狭くなったり、潰瘍かいようや痛みがでることがあったり、周囲に炎症を起こしたりする可能性があります。妊婦、授乳中、腎臓の機能が著しく悪い方は、この治療を行うことはできません。また、治療前に大腸癌が痔の背後に隠れていないか確認するために大腸カメラを一度受けていただくことが必要となります。

